東北新幹線開通後の盛岡の景観の分類と評価

岩手大学　正会員　安藤 昭
岩手大学　正会員　赤谷 隆一
岩手大学　学生員　○佐竹 克也

1、はじめに

城下町起源の都市「盛岡」は、杜の都と言われ、山と杜と川のつくり出す四季折々の美しい景観を持つ街である。しかし、この街にも近年、高速自動車道および東北新幹線の開通などにより、著しく近代化の波が押し寄せ、マンションをはじめとする高層ビルが建ち並び、旧い街並や歴史のある建物などが消え、この街の持つ情緒が次第に失なわれてきている。

本研究は、このように変化してきている盛岡を取り上げ、この街の持つ個性を守ることが大切であるという考えのもとに、景観写真を都市景観のモデルとし、住民による景観の類型化と評価を通して、景観特性を追求するものである。

2、盛岡の自然的・社会的背景

盛岡の人口は23.4万人で、月別平均気温で最高23.0℃（8月）～最低−2.2℃（1月）と寒暖の差が大きい。年間降水量，年間日照時間は1168.5mm，1945.5hrである。市域面積は399km²で、東部は傾斜4°～12°の丘陵で西部は低地に広がる田園地帯を経て山地の裾野に接する起伏のはげしい変化に富んだ地形である。

3、調査対象および調査・解析方法

実験に用いた盛岡市内とその周辺の写真は、4年前の同様の実験と同じ地点・アングルで撮影した87枚、それに、ここ数年間で急激に増加した高層ビル（マンション），中層住宅（アパート）の6枚を加えた計93枚の写真（Nikon標準レンズ50mm，リジカラーフィルム使用）である。被験者は地域的な差が生じないようにするため、当市街化区域を3ブロックに分け、そのブロックごとにランダム・サンプリングによって全部で20メッシュを選定し、そこに在住する18才以上の男女390人とした。調査は面接調査法で、被験者に写真を見せ、写真の景観を手掛りとして似ていると思われる景観の群を作らせ、さらに各景観について5段階評価（良い～悪い）をさせる方法を用いた。集計は在住年数20年未満と20年以上とに分けて行ない、その結果を比較・考察した。なお、景観の類型化にはクラスター分析（群間平均距離法）を用い、景観の選好評価および景観評価の解析には情報理論および系列カテゴリー法を用いた。

4、解析結果および考察

景観パターンおよび評価について解析した結果を表−1（在住年数20年未満），表−2（在住年数20年以上）に示す。以下、在住年数20年未満の

表−1　景観パターンおよび景観評価

（在住年数20年未満）

区分	景観パターン	記号	枚数	視点場	対象景	評価値	順位
緑空間	都市周辺・田園景観	A	11	都市周辺丘陵地、田園	市街地と山並み、田園と山並み	0.0306	9
	岩手山を背景とする景観及び都市河川景観	B	11	河岸、緑地、浦岸、丘陵地	岩手山と河川及び緑水	0.4954	1
	都市近郊河川景観	C	8	河岸、緑地	河川	0.3189	4
	公園・史跡景観	E	2	公園	公園と史跡	0.3887	2
構造空間	街路景観 主要幹線街路景観	F1	2	道路	道路、バイパス	−0.2577	12
	幹線・補助幹線街路景観	F2	10	街路	商店街	−0.5178	13
	界隈景観	F3	4	街路	一般道路	0.1912	5
	区画街路景観（1）	G1	6	街路	中・高層住宅	−0.6846	15
	区画街路景観（2）	G2	4	住宅地沿道	低層住宅街	−0.5227	14
	構築景観	H	5	構築周辺	構築	0.0461	8
	教育・文化・レクリエーション施設景観	I	7	教育・文化・レクリエーション施設周辺	教育・文化・レクリエーション施設等	0.1853	7
歴史的景観	社寺景観	J	6	社寺周辺	社寺建築物群	0.3291	3
	学校・大学景観	K	5	校舎、キャンパス及び周辺	教育機関等	0.1889	6
	城郭景観	L	9	城郭跡周辺	城郭跡等	−0.0839	10
	パーソナル景観	P	3	――――	――――	−0.1515	11

調査期間：昭和60年11月28日～61年1月11日

表−2　景観パターンおよび景観評価

（在住年数20年以上）

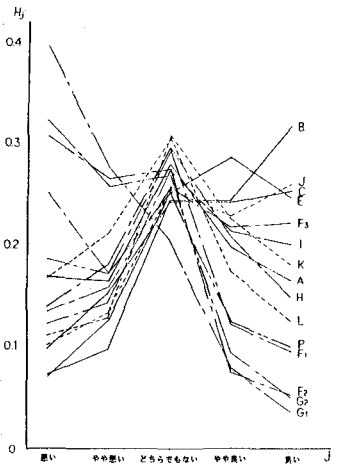
区分	景観パターン	記号	枚数	視点場	対象景	評価値	順位
緑空間	都市周辺・田園景観	A	9	都市周辺丘陵地、田園	市街地と山並み、田園と山並み	0.0943	10
	岩手山を背景とする景観	B	10	緑地、浦岸、丘陵地	岩手山と河川・緑水・市街地	0.6985	1
	都市近郊河川景観	C	7	河岸、緑地	河川	0.4751	4
	都市河川景観	D	9	河岸、緑地	河川、緑地、ビルディング等	0.3808	6
	公園・史跡景観	E	2	公園	公園と史跡	0.5304	2
構造空間	幹線街路景観	F12	11	街路、道路	バイパス、一般街路、商店街	−0.2710	12
	区画街路景観（1）	G1	6	街路	中・高層住宅	−0.5264	14
	区画街路景観（2）	G2	4	住宅地沿道	低層住宅街	−0.3442	13
	教育・文化・レクリエーション施設景観	I	8	教育・文化・レクリエーション施設周辺	教育・文化・レクリエーション施設等	0.3533	7
歴史的景観	社寺景観	J	6	社寺周辺	社寺建築物群	0.5072	3
	学校・大学景観	K	5	校舎、キャンパス及び周辺	教育機関等	0.2607	8
	神社景観	M	3	神社周辺	神社建築物	0.0136	11
	歴史的建築景観	N	8	建築物周辺	建築物等	0.4882	5
	パーソナル景観	P	5	――――	――――	0.1829	9

調査期間：昭和60年11月28日～61年1月11日

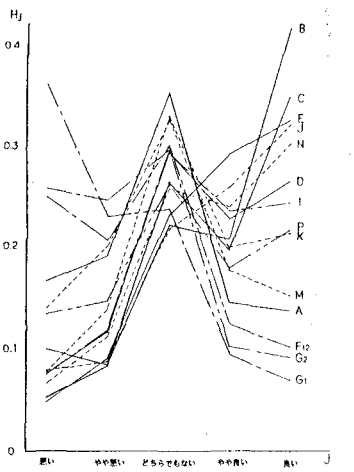
グループをⅠグループ，20年以上をⅡグループと呼ぶことのする。

(1)、景観の類型化

Ⅰグループ，Ⅱグループとも景観は緑空間，機能空間，歴史的景観に分類され、さらにⅠグループでは14分類に細分され、Ⅱグループでは13分類に細分された。その際、いずれの場合も類型化のできない景観写真があったので、これをパーソナル景観（個人によって類型化・評価の異なる景観）と呼び、1分類として取り扱うことにする。したがってⅠグループは15分類、Ⅱグループでは14分類に類型化された。特徴をみると、Ⅰグループで、岩手山を背景とする景観と都市河川景観が同じ分類になるなど、Ⅱグループに比べてパターンの内容を説明し難いものが表われた。また、Ⅰグループで類型化された界隈景観がⅡグループでは歴史的建築物景観として分類されている。これは、Ⅱグループが界隈全体の雰囲気よりもその中の歴史のある建築物を強くイメージしているからと考えられる。学校・大学景観が建築景観に含まれず独立して分類されたのも興味深い。



図－1　情報量指標に基づく景観の選好評価値　（Ⅰグループ）



図－2　情報量指標に基づく景観の選好評価値　（Ⅱグループ）

(2)、景観評価

選好評価値とそのグラフ（図－1，図－2）から、ⅡグループはⅠグループに比べ全体的に「悪い」という情報量（H_1）が小さく、「良い」という情報量（H_5）が大きくなっている。これは、在住年数が長くなると景観に対して、「良い」という比率が高くなり、「悪い」という比率が低くなることを表わしている。次に、緑空間は全体的に高く評価され、機能空間においては界隈が高い評価をうけているが、街路景観の評価は非常に低い。さらに歴史的景観においては社寺，歴史的建築物の評価が高くなった。また、在住年数にかかわらず岩手山を背景とした景観，社寺景観，河川景観の評価が高く、盛岡が山と姓と川の美しい街であることを住民が強く意識していることがわかる。評価が低かった街路景観に注目すると、中・高層住宅，低層住宅街，商店街の評価が低く、その中でも特に現在増え続けているマンションが最も低いことがわかり、盛岡において、住宅地および街並などの生活に密着した場所の評価が低いことが課題であるといえる。

(3)、岩山からの眺望景観について

緑空間において都市俯瞰・田園景観の評価だけが低くなった。これは、写真の視野の制限によるものと考え、すでに行なわれたイメージ調査で評価の高かった岩山からの眺望をパノラマにし、それを5段階評価してもらい、その評価と岩山からの写真2枚（No.1，No.6）を1グループとしたものの評価とを比較してみた。その結果を表－3に示す。これをみると、Ⅰグループ，Ⅱグループともに2枚の写真よりパノラマの方の評価が高いことが歴然としている。このことから、都市俯瞰・田園景観の評価が低いのは写真による視野の制限が影響していたからと考える。

表－3　岩山からの眺望景観の評価値

写真番号	Ⅰグループ	Ⅱグループ
No.1,No.6	0.3292	0.0875
No.94(パノラマ)	0.9749	1.0078

4、まとめ

以上の結果より、盛岡市およびその周辺では相変わらず自然景に対する評価が非常に高い反面、生活景に対する評価が非常に低いということがわかった。さらに、現在、増え続け都心部の環境悪化の問題となっている中・高層住宅の評価が、実際の実験でも極めて低いという結果が得られた。

・参考文献　「城下町起源の都市盛岡の景観評価に関する研究」佐々木猛，外川明広　卒業論文（S.57.3）